

## 感染症予防衛生隊研修と実地訓練

平成20年7月23日 酪農学園大学研修館と敷地内にて



感染症と鳥インフルエンザに関する研修



北海道ペストコントロール感染症予防衛生隊員

酪農学園大学教授佐々木均博士の絶大なる御尽力を得て、平成20年7月23日同校敷地内の研修館で標記研修と養鶏舎にて実地訓練を行った。会場の研修館はまだ真新しい木の香りがする建物で、日本の杉自生林の最北地である道南材を内装に使った大変贅沢なもので、道南出身の倉田会長としても誇らしい施設だった。また、隣接して近代酪農の象徴であるレンガ作りのサイロと牧舎が、手入れの行き届いた芝生の海に浮かぶように保存しており、芝生の緑とレンガの赤のコントラストが素晴らしかった。

今年、北海道東地区で渡り鳥のハクチョウから高病原性鳥インフルエンザウイルスを検出して初めての本格的な研修と実地訓練であったので、広い道内の各地から協会会員ばかりか、行政官、行政技術者、研究機関などから総勢72名が参加し、会場は満席状態となった。参加者内訳は会員会社社員が38名、非会員4名、酪農大学3名、北海道各部門6名、道衛生研究所3名、道家畜保健所各所12名、札幌市3名、北広島市1名、千歳市2名であった。受付から会場準備は、事前に本部へ登録済みの感染症予防衛生隊員らによって、てきぱきと処理され、実に頼もしい隊員達だった。午後1時から研修が開催され、まず感染症予防衛生隊本部長である、倉田北海道ペストコントロール会長から、開催に尽力頂いた佐々木教授と石狩家畜保健所主査山本氏に対し丁重なる謝意を述べられた。また、茨城県から陸路で来られたが、突然道南地方が大雨にみまわれてJRが不通となったため、急遽函館からタクシーに乗り換えて、酪農大学までこられた茨城県PCO協会会長梅沢氏へ感謝の意を表した。研修演題と講師は以下のとおり。

- |                       |                  |          |
|-----------------------|------------------|----------|
| 1、感染症媒介生物             | 酪農学園大学 教授        | 佐々木 均 博士 |
| 2、鳥インフルエンザ            | 北海道石狩家畜保健所 予防課   | 山本 泰弘 主査 |
| 3、茨城県における鳥インフルエンザ防除事例 | 茨城県ペストコントロール協会会長 | 梅澤 謙二    |

質疑応答は協会会員からよりも行政関係者や研究者から梅沢氏への質問が多く、実務経験した消毒現場への関心の高さを実感した。

## 実地訓練

心配していた雨もあがり、研修館から広い広い大学キャンパスを車で乳牛の群れや牛舎、酪農製品加工施設を横目に眺めながら、圃場駐車場へと移動。こちらのほとんどの大学生は駅舎、校舎、研究施設、牧舎、学生寮、食堂の間を自転車で移動していた。大都会札幌の隣に、北海道らしさがまさにここに凝縮している感じだ。今回の研修参加者にも大勢の酪農大学出身者が参加されたのも1つの特徴でもあった。訓練の始まりはまず、防護服の正しい着用であり、感染症予防衛生隊副本部長である藤村副会長と梅澤氏の指導により、協会本部作成のマニュアルに従い、積極的な隊員の協力を得てパフォーマンスが進められた。ギャラリーがそれを遠巻きにカメラにおさめるスタイルとなった。マニュアルに追加して実地経験から得たいろいろなアドバイスを梅澤氏より頂いた。次に、トラックとワゴン車の消毒手順となり、ここは研究施設であるため、水だけではあったが、ウイルスが付着した汚泥が車ボデーに有るとの仮定で、見落としがちなところに、細かい指示を得て、隊員たちは真剣に訓練をした。訓練は養鶏舎へと移動し、内部には散布できなかったものの、外部の散布手順を学んだ。今回の研修と実地訓練は佐々木教授の御理解と御尽力が無ければ実現しなかったことであり、心から感謝を申し上げたい。また、隊員たちの真摯な指導の受け方も心に残った。会社ごとにそれぞれの消毒手順があろうかと思うが、感染症予防衛生隊を結成したからには、いわゆる“俺流”を排除して、隊員全員が同じ手順で実行しなければ、広域感染症をどうい予防することは出来ない。すべての参加隊員のさわやかな受講態度に倉田本部長が目を細めたのを私は見逃さなかった。

(文責青山)



互いに確認しあいながらの防護衣着用



藤村副本部長と梅澤氏による実施訓練



よく見ながらのトラック消毒訓練



養鶏舎の消毒訓練